小高町文化財調査報告第３集

角部内南台遺跡

２００１年３月

福島県相馬郡小高町教育委員会

小高町文化財調査報告第３集

角部内南台遺跡

２００１年３月

福島県相馬郡小高町教育委員会

角部内南台遺跡全景（北から）

ＳＫ０５土器出土状況

目　　次

原色図版

目　　次

例　　言

凡　　例

第1章　概　　要 …… 1

第1節　調査にいたる経緯 …… 1

第2節　遺跡の概要 …… 1

第3節　周辺の遺跡 …… 4

第4節　調査の概要 …… 5

第2章　遺構と遺物 …… 8

第1節　A　　区 …… 8

第2節　B　　区 …… 20

第3節　その他の遺物 …… 25

第3章　ま　と　め …… 27

引用・参考文献 …… 28

出土土器観察表 …… 31

出土土製品・石器観察表 …… 35

写真図版

例　　言

1．本書は福島県相馬郡小高町角部内字南台・雁北に所在する角部内南台遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は研修センター建設に伴う事前調査として小高町教育委員会が実施した。
3．発掘調査は平成１１年１０月から平成１２年１月まで、整理調査および報告書作成は平成１２年２月から平成１３年３月まで実施した。
4．発掘調査から報告書作成までの調査事業費は開発事業者である水谷建設株式会社の負担による。水谷建設株式会社には事業推進にあたり十分なご理解とご協力を賜った。
5．本書の執筆と編集は川田強が担当した。
6．本書の調査において以下の項目を委託した。
　空中写真測量：新日本航測株式会社福島営業所
7．調査および報告書作成にあたり玉川一郎氏にご協力・ご指導を賜った。
8．中野義政氏、中野重良氏には表採資料を貸出いただき、参考資料として掲載することができた。記して感謝を表したい。

凡　　例

1．本書で掲載した挿図の縮尺は各挿図に記してある。

2．遺構等の平面図のトーンによる表現は各図にその内容を記してある。

3．図示した遺物については観察表にその内容を記してある。出土土器観察表の法量は上段：口径、中段：器高、下段：底径であり、（　）表示は復元値である。

4．遺物実測図の表現は次のとおりである。

黒色処理：部分

須 恵 器：断面

5．写真図版の遺物の縮尺は不同である。

6．遺物写真の番号は挿図番号に対応している。

第1章 概　　要

第1節 調査にいたる経緯

角部内南台遺跡は「角部内南台東貝塚」「角部内南台南貝塚」を含み、縄文時代を中心とした遺跡とされていた。平成１１年５月、この角部内南台遺跡に隣接する地点で水谷建設株式会社から研修センター建設計画に伴う埋蔵文化財所在確認申請が小高町教育委員会に提出された。同月、小高町教育委員会は開発対象地の表面調査を実施し、対象地の一部で土師器・須恵器等が表採されることから、試掘調査が必要なことを同年６月に回答した。

同年７月、事前協議の上、小高町教育委員会による試掘調査が実施された。調査では数箇所のトレンチから奈良・平安時代の遺物及び遺構が検出された。この結果により、埋蔵文化財包蔵地は開発対象地区まで拡大することが明らかとなり、平成１１年８月３０日付で文化財保護法第５７条の６第１項に基づく遺跡発見届を提出した。また、同年８月、開発対象地の一部が要保存対象地区と設定されたことから、開発の変更が困難な場合、事前の発掘調査による記録保存が必要な旨を水谷建設株式会社に報告した。

この結果に基づき、協議を行ったところ、開発の変更は困難であるとのことから、発掘調査を平成１１年度中に実施することとなった。

小高町教育委員会は平成１１年１０月２６日付で文化財保護法第９８条の２第１項に基づく発掘届を提出し、平成１１年１０月２６日から平成１２年１月３１日まで発掘調査を実施した。

第2節 遺 跡 の 概 要

角部内南台遺跡は福島県相馬郡小高町角部内字南台・雁北に所在する。遺跡は小高川南岸の中位段丘上（第３段丘）にあり、段丘平坦面は標高約２５ｍを測る。段丘上からは東に約２００ｍの距離をもって太平洋を、北に小高川河口の潟湖である前河浦を望むことができる。

本遺跡はこれまで縄文時代の貝塚を含む遺跡として注目されてきた。角部内南台南・東貝塚と称される貝塚はいずれも町指定史跡に指定されている。これらの貝塚は遺跡の東南端、舌状にせり出した台地縁辺部を取り巻くように分布している。

東貝塚では昭和６１年に小高町教育委員会により、法面工事に伴う発掘調査が実施され、縄文中期のアサリを中心としたブロック貝層を確認している。この調査では主に縄文前期前半～中期後半の土器が出土しており、貝塚の形成時期は概ねこの時期に相当するものと考えられている。

小高町は相双地区の中では際立って多くの貝塚が確認されている地域であり、大別すると７箇所を数える。これらの多くは縄文前期前半の土器を出土することが多いが、中期の土器を認められるのは現海岸線を望む立地であるこの角部内南台東・西貝塚と浦尻貝塚および北原貝塚遺跡群である。これらは比較的大規模な貝層を持ち、形成時期も長く、また保存状況も良好であることが予測され、特に貴重な貝塚群といえるだろう。

また、『小高町史』（小高町 1971）には本遺跡内と考えられる「雁北遺跡」との呼称で石庖丁が出土したとの記録がある。その他、これまでにも桜井式とされる弥生土器および土師器・須恵器片が表採されていたことから、本遺跡は縄文～奈良・平安時代の複合遺跡と考えられてきた。

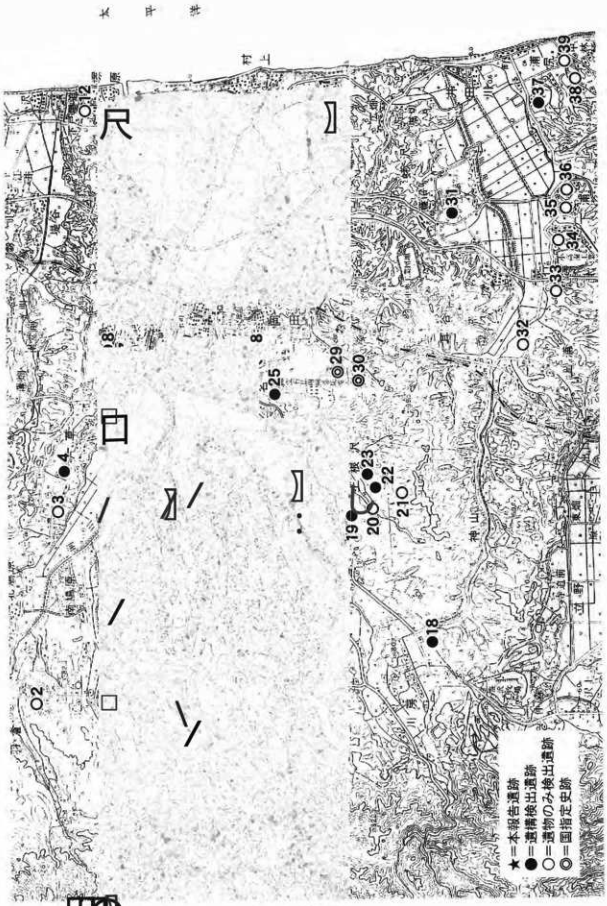


図1

表１　周辺の遺跡一覧（奈良・平安時代）

No.	遺跡名	所在地	遺構	備考
1	角部内南台遺跡	角部内字南台	木炭焼成土坑	鉄滓・羽口・土錘
2	君ヶ沢遺跡	羽倉字君ヶ沢		鉄滓
3	堤下遺跡	北鳥原字堤下		
4	片草南原遺跡	片草字南原	住居址	
5	荒神前遺跡	片草字荒神前		
6	上広畑遺跡	小高字上広畑		
7	東広畑Ａ遺跡	小高字東広畑		鉄滓
8	東広畑Ｂ遺跡	小高字東広畑	住居址・土坑	鉄滓
9	大井花輪遺跡	大井字花輪・東平・松崎	住居址	
10	原遺跡	大井字原		
11	清信遺跡	大井字清信		
12	調坊原遺跡	塚原字調坊原・沼ノ上・調坊前・釜ノ上		
13	西台遺跡	小谷字西台		
14	犬塚Ａ遺跡	大富字犬塚		
15	大富西畑遺跡	大富字西畑・東畑・犬塚		
16	横大道遺跡	飯崎字横大道・西原		
17	飯崎南原遺跡	飯崎字南原		
18	四ツ柔遺跡	川房字四ツ柔	住居址・木炭焼成土坑	
19	北向Ａ遺跡	上根沢字北向	住居址・掘立柱建物址・木炭焼成土坑	鉄滓
20	掘込遺跡	上根沢字堀込		鉄滓・羽口
21	鳶沢Ｂ遺跡	上根沢字鳶沢		鉄滓
22	岩洞Ａ遺跡	上根沢字岩洞	木炭窯・木炭焼成土坑	
23	鳶沢Ａ遺跡	上根沢字鳶沢	木炭焼成土坑	羽口
24	原畑遺跡	上根沢字堂北・水溜・原下・田畑・原畑・堀込		
25	中村平遺跡	吉名字中村平・小是木字一本松	住居址	
26	玉ノ木平Ｂ遺跡	吉名字玉ノ木平		
27	玉ノ木平Ａ遺跡	吉名字玉ノ木平		
28	玉ノ木平Ｃ遺跡	吉名字玉ノ木平		
29	観音堂石仏	泉沢字後屋		国指定史跡
30	薬師堂石仏	泉沢字薬師前		国指定史跡
31	後迫遺跡	蛯沢字後迫	住居址	
32	加賀後貝塚	上浦字加賀後		
33	鹿島館遺跡	行津字鹿島館		
34	館下遺跡	下浦字館下		
35	西ノ内遺跡	下浦字西ノ内		
36	薬師前遺跡	下浦字薬師前		
37	浦尻貝塚	浦尻字南台・台ノ前・西向・大塚・小迫	住居址	鉄滓
38	中林崎遺跡	浦尻字中林崎		
39	北原貝塚遺跡群	浦尻字北原・前田・北向・滝ノ迫		

第3節　周辺の遺跡

今回の調査で検出された遺構・遺物は奈良・平安時代が中心であった。よって、ここでは小高町内の奈良・平安時代の遺跡について述べることとする。

町内で奈良・平安時代に相当する遺跡は現在のところ３９遺跡を数える。しかしながら、詳細な分布調査が未だ実施されていないので、実数はより多くなることが当然予想される。これまでに当該期の遺構及び遺物を確認した遺跡を図１に示し、表１を作成した。これらの多くは発掘調査がほとんどなされておらず、遺物を表採しただけの遺跡が多く、現時点では多くのことは言及できないものの、ある程度の特徴を示していると考えられる。

まず、当該期にいたっては遺跡の分布範囲が拡大していることが指摘できる。小高川及び前川等のその支流を望む丘陵上および旧井田川浦に面した丘陵上の分布が顕著であり、古墳時代の遺物がほとんど認められない河川中上流域までの分布が確認される。請戸川用水路関係で調査された上根沢の遺跡群〔北向Ａ（１９）・鷹沢Ａ遺跡（２３）等〕では８世紀中葉以後の遺物が主体的であり、その他の遺跡でも、断片的ではあるが、平安時代に相当する遺物が最も多い。このようなことから遺跡が広い範囲で認められるようになるのは概ね８世紀中葉以後の分布状況と推察される。

また、これらの遺跡では、鉄滓や羽口の出土が顕著であり、木炭焼成土坑を検出することが多い。これらは金沢製鉄遺跡群のような大規模な製鉄遺跡ではないと考えられるが、多くの遺跡が製鉄・鍛冶関連遺構・遺物を伴うことは当地域の特徴を示すものと言えるだろう。

住居址は小高川（前川）北岸の中下流域にある片草南原（４）・東広畑Ｂ（８）・大井花輪遺跡（９）から主に平安時代に相当するものが検出されている。これらの遺跡がある小高川北岸丘陵上は古墳時代中後期と推定される古墳群が多く認められる箇所でもあり、古墳時代以後の集落がある程度の継続性をもって存在するものと考えられる。

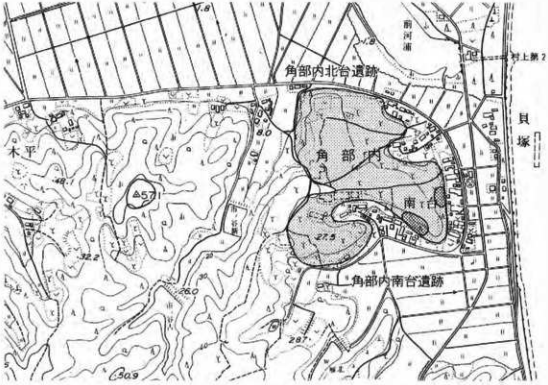


図２　角部内南台遺跡位置図（Ｓ＝１／10000）

中村平遺跡（２５）では平成１２年の調査により７世紀後半の住居址が検出され、近接して小規模な円墳からなる中村平古墳群が存在している。奈良・平安時代の遺物も表採されることから、小高川北岸の遺跡と同様、古墳時代以後の集落が存在しているものと推測される。

１８～２３の小高川中上流域に位置する遺跡は請戸川用水路関係で確認された遺跡である。調査面積はいずれも大きくはないが、当町では調査が比較的多く行われている地区である。これらからは住居址や掘立柱建物址の他、木炭焼成土坑などが検出されており、先述したように８世紀中葉以後の遺物が主であり、鍛冶関連遺構・遺物が特徴的である。北向Ａ遺跡では金属器模倣杯の出土から遺跡の官的な性格が指摘されている（能登谷 1998）。

その他、旧井田川浦に面した後迫遺跡（３１）では平成９年に小高町教育委員会により調査が実施され、奈良・平安時代の住居址９軒検出したほか、浦尻貝塚（３７）でも平成１２年の調査で平安時代の住居址を１軒確認している。このように発掘調査に進展に伴い、当該期の遺構・遺物はかなり増加することが予測される。

小高町で当該期の遺跡として特筆されるのは国指定史跡「薬師堂石仏・観音堂石仏」である。これらの築造年代はいまだ不明であるものの、一般に言われている平安時代後半より古いものとする見解がある。東北最大とも言われる石仏群であるだけに、その築造時期は当地域の平安時代を考える上で重要な歴史的な意義が含まれていると考えられる。美術史的な観点だけではなく、歴史的資料として改めて位置付ける必要がある遺跡と言えるだろう。

隣接する原町市では金沢製鉄遺跡群が大規模な製鉄遺跡群であることが確認されている。また、近年、継続的に行方郡衙と推定される泉廃寺跡の調査が実施されており、郡庁域を確認するなど多大な成果をあげている。このような成果により、当地方の奈良・平安時代は大きな注目を集めている状況にある。小高町では現在のところ奈良・平安時代の資料は十分なものとはいえないものの、調査の進展とともに、これらの成果とあわせて、検討することが必要となってくるだろう。

第４節　調査の概要

１．調査区について

先に行われた試掘調査では、開発対象地の段丘平坦面では削平が行われており、遺構・遺物が検出されなかったが、谷部を中心として奈良・平安時代の遺物包含層および土坑が確認された。この結果に基づき、事業者との協議の上、開発対象地の遺物の出土が顕著である地点を中心に調査区を設定した。

調査区は図３・４に示す２地区である。調査面積はＡ区で９０６㎡、Ｂ区で２５５㎡で合計１,１６１㎡である。

Ａ区は海岸線より進入した支谷にいたる南向斜面にある。現海岸線より約５００ｍを測る。試掘調査により、奈良・平安時代の遺物包含層と土坑が検出されたことから調査区に設定した。

Ｂ区はＡ区より約６０ｍ北西に位置する。北東方向に傾斜する埋没谷の谷頭に相当する。試掘調査における図４に示す７Ｔから、土師器・須恵器片が多数出土したことから、同様の状況にあり、遺構等が確認される可能性が高いと判断して調査区に設定した。

Ａ区・Ｂ区の間は約５０ｍの幅をもって段丘平坦面が存在するが、試掘調査によりすべて削平されていることが確認された。Ａ・Ｂ区の調査状況から本来は何らかの遺構があったものと考えられる。

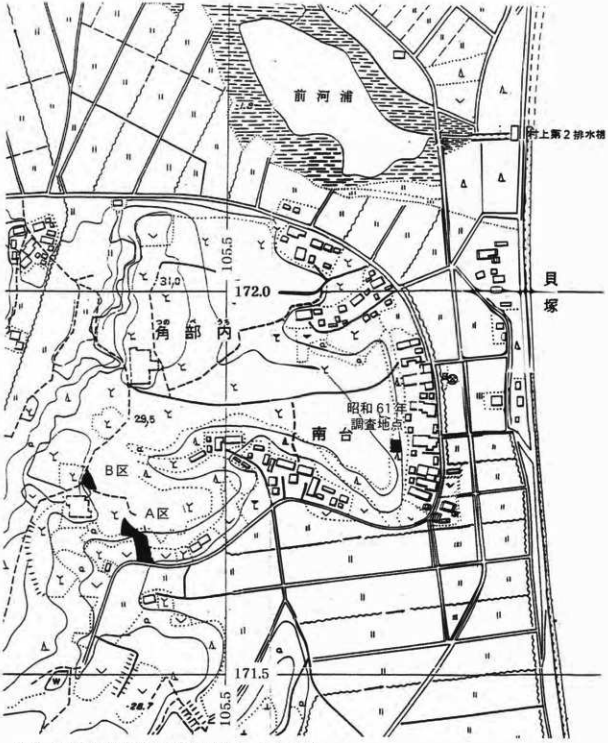


図3 角部内南台遺跡調査状況図（S＝1／5000）

2．調査方法について

調査は重機による表土掘削の後、国家座標軸を基準として、5ｍグリットを設定し実施した。

遺構確認面はＢ区では青灰色シルト面、Ａ区は斜面上位で黄褐色土上面とした。Ａ区斜面下位ではＢ区と同じく青灰色シルト面を確認面とした。両地区とも谷部においては広い範囲で黒色（黒褐色）土が確認され、遺物を多く含む包含層であることから、黒色（黒褐色）土層より、人力で掘削を行い、調査を実施した。

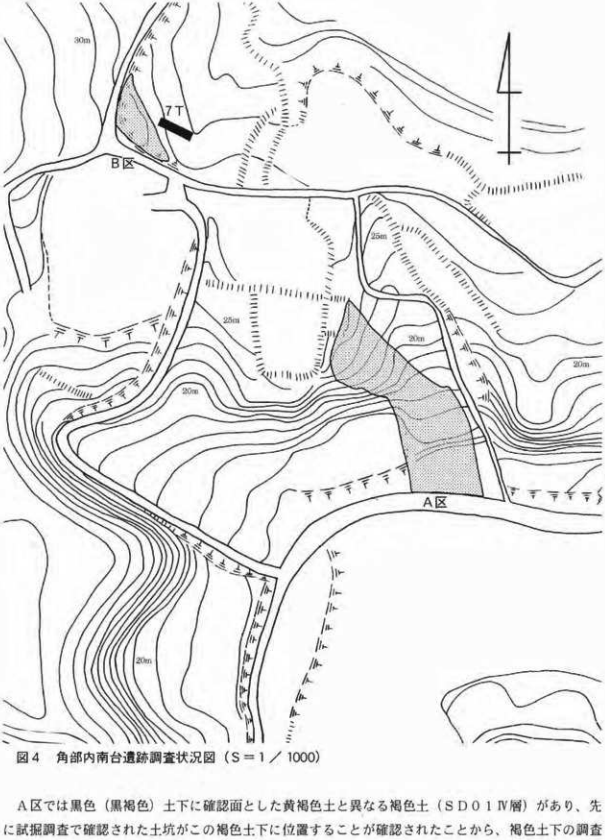


図4　角部内南台遺跡調査状況図（S＝1／1000）

A区では黒色（黒褐色）土下に確認面とした黄褐色土と異なる褐色土（SD01Ⅳ層）があり、先に試掘調査で確認された土坑がこの褐色土下に位置することが確認されたことから、褐色土下の調査も必要となった。この褐色土は黒色（黒褐色）土（SD01Ⅱ・Ⅲ層）除去後の広い範囲で確認され、遺物が多く含まれず、小石・レキを多く含むことから、短い期間に埋没谷へ堆積したものと考えられた。このことから、黒色（黒褐色）土（SD01Ⅱ・Ⅲ層）の調査終了後、重機によりこの褐色土（Ⅳ層）を除去し、遺構等の確認を行った。

第2章　遺構と遺物

第１節　Ａ　　区

Ａ区は当初埋没谷と考えた谷部の調査である。最も高い地点で標高約２３ｍ、低い地点で標高約１０ｍを測る。斜面上位の確認面は黄褐色土、斜面下位は青灰色シルトであり、概ね標高１３ｍ付近まで、黄褐色土が分布する。

谷を埋める覆土は黒色（黒褐色）土であったが、これらを除去した段階でこれらは単なる埋没谷ではなく、人為的に掘削した遺構であることが確認された。斜面上位のＳＸ０３は斜面を掘削して、平坦面を作り出した遺構である。ＳＤ０１は谷底部を掘削して構築された溝であった。ＳＸ０３とＳＤ０１の間およびＳＸ０３より北側の部分は後世の耕作により削り取られており、表土下に地山である黄褐色土が確認された。

試掘調査で確認されたＳＫ０３はＳＤ０１下のⅣ層（褐色土）より下位にあることが確認された。このことから、Ⅳ層を除去し、調査を実施したところ８基の土坑と溝状の遺構であるＳＸ０１が確認された。

図５は褐色土（ＳＤ０１Ⅳ層）除去後に空中写真測量により作成したものである。

ＳＤ０１(図６～１０)

ＳＤ０１は谷底を掘削することによって構築された溝である。明確に人為的な掘削が確認できるのは谷底の幅約1.2～1.6ｍの溝であり、これをもってＳＤ０１としたが、この溝に沿う形で谷を整形しているものと考えられる。また、谷底のＳＤ０１を中心として、周囲には連結するような溝やピットが確認され、谷全体にわたって何らかの掘削が行われていたものとすることができよう。

ＳＤ０１は斜面を蛇行するように形成されており、旧地形を利用したものと推察される。全長約３７ｍ、遺構底面の比高差は約８ｍあり、最も高い箇所で標高１８.１ｍ、最も低い箇所で標高１０.２ｍを測る。ＤＤ'ライン以下ではこのＳＤ０１は二方向に分かれるものと推定される。

ＳＤ０１の底面には数箇所において、ピットが検出された。Ｐ１～６は溝底面より３０㎝ 以上の深さを持つ。Ｐ２では底面にレキが敷き詰められており、湧水が認められた。これらは底面に沿って構築されていることから、ＳＤ０１存続時期のものと考えられる。

土層はⅠ・Ⅱ層が谷全体を覆う覆土であり、Ⅲ層がＳＤ０１に堆積するものである。いずれの層も小石・小レキをまんべんなく含んでおり、特にⅢ層はⅡ層に比べ、締りがなく、やや砂質のものを主体とすることから、流水の影響を強くうけ堆積したものと考えられる。ＳＤ０１Ｐ２ではⅢ層中より炭化物が集中する層が検出された。

遺物はⅡ層中よりの出土が多く、Ⅲ層からの出土は少なかった。これらはいずれも、遺物量に比べ接合するものが少なく、復元率も低い。また、摩滅が激しいものも多く認められる。このようなことから、これらの遺物は本来ＳＤ０１に廃棄されたものではなく、流水等の影響により二次的に堆積したものと考えられる。

ＳＤ０１下にあるⅣ層（褐色土）は厚さ約２０～８０ｃｍあり、主にＤＤ'ライン以北の谷部だけで確認されるものである。遺物はⅡ層に比べ、極めて少ないものであった。締りが強く、小石・レキを多量に含み、地山の黄褐色土に類似することから、何らかの要因で斜面上位より崩落したものと考

図５　Ａ区全体図（Ｓ＝１／300）

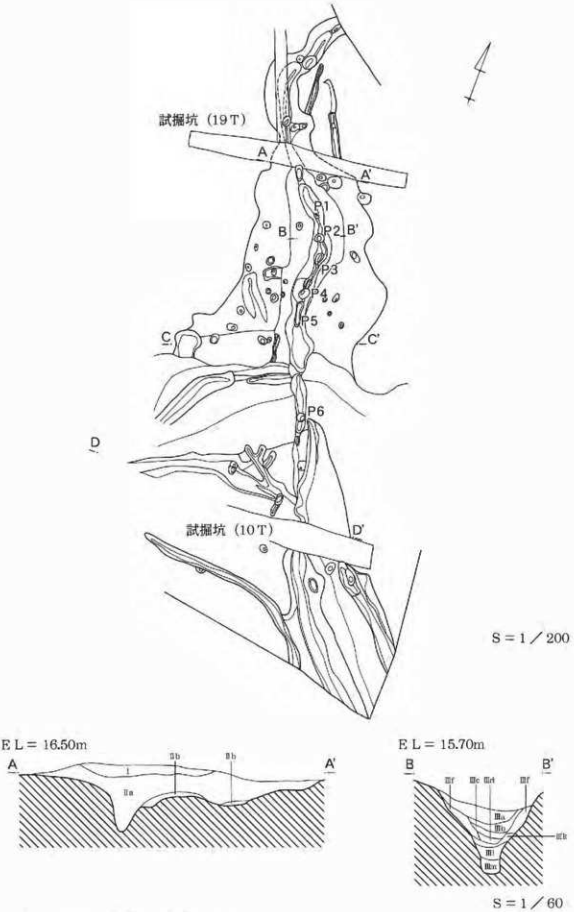


図６　ＳＤ０１実測図・断面図（Ｓ＝１／２００・１／６０）

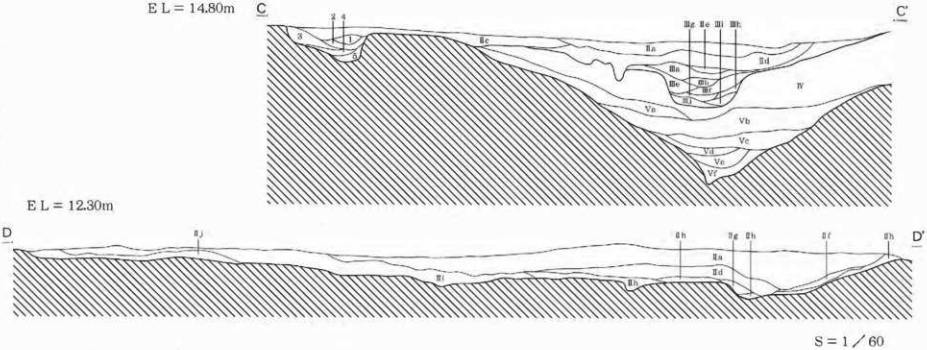


図7　SD01断面図（S＝1／60）

Ⅰ	灰黒色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。	Ⅲ i	黒褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック少量。
Ⅱa	黒褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ少量。	Ⅲ j	暗褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック多量。
Ⅱb	明黒褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。褐色粒少量。	Ⅲ k	黒褐色砂質土	粘性・締り無。褐色粒・小レキ微量。
Ⅱc	黒褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック少量。	Ⅲ l	黒色砂質土	粘性・締り無。
Ⅱd	暗黒褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。褐色粒少量。	Ⅲm	レキ層	レキ主体（湧水有）。
Ⅱe	黒褐色土	粘性やや有。締り無。小レキ多量。	Ⅳ	褐色土	粘性・締り有，小石・レキ多量。
Ⅱf	黒褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。褐色粒少量。	Ⅴa	黒褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ・褐色土ブロック少量。
Ⅱg	黒色土	粘性・締りやや有。小石微量。	Ⅴb	黒褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。
Ⅱh	暗褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック多量。	Ⅴc	暗黄褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。
Ⅱi	暗褐色土	粘性・締りやや有。小石・褐色粒・褐色土ブロック多量。	Ⅴd	暗褐色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。
Ⅱj	暗褐色土	粘性・締りやや有。褐色粒・褐色土ブロック多量。	Ⅴe	灰黒色土	粘性・締りやや有。小石・小レキ微量。
Ⅲa	黒色土	粘性やや有。締り無。小石・小レキ微量。遺物少量。	Ⅴf	灰黒褐色土	粘性・締り有。小石少量。
Ⅲb	暗褐色土	粘性・締り無。小石・小レキ・褐色粒微量。			
Ⅲc	暗褐色砂質土	粘性・締り無。			
Ⅲd	暗褐色砂質土	粘性・締り無。小石・小レキ・炭化物多量。	1	黒褐色土	粘性・締りやや有。褐色粒微量。
Ⅲe	明黒褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック多量。	2	黒褐色土	粘性・締りやや有。褐色粒・褐色土ブロック少量。
Ⅲf	黒褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック微量。	3	暗褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック多量。
Ⅲg	褐色土	粘性・締り無。小石・小レキ多量。	4	黒色土	粘性・締りやや有。褐色粒微量。
Ⅲh	黒色土	粘性・締りやや有。	5	褐色土	粘性・締りやや有。褐色土ブロック主体。

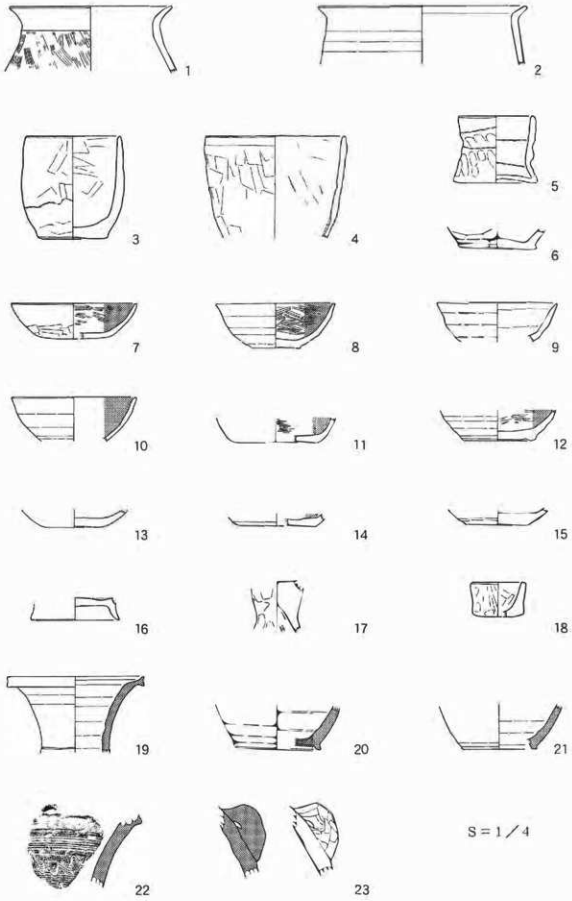


図８　ＳＤ０１Ⅰ～Ⅲ層出土土器（Ｓ＝１／４）

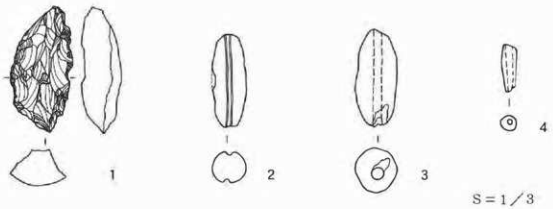


図９　ＳＤ０１Ⅰ～Ⅲ層出土遺物（Ｓ＝１／３）

えられる。Ⅳ層下には黒褐色土を基調とするⅤ層が確認された。遺物はほとんど出土せず、下面では湧水が認められた。

図８・９はＳＤ０１および谷全体を覆うⅡ層中から出土した遺物である。

出土土器は図８に示した。１は体部中位に最大径を持つハケ目甕、２はロクロ調整の甕である。３・４は粗雑なつくりの小形の甕であり、外面にヘラ削りが施される。５はいわゆる「筒形土器」で外面指ナデ調整、内外面に輪積痕を残す。６はヘラ削り調整の甕である。

７は平底でやや内湾気味に立ち上がる形態の杯である。摩滅しているので、ロクロ整形かどうか明確ではない。８は底部糸切り未調整でやや内湾気味に立ち上がり、口縁がわずかに外反する杯である。１０は底部が欠損しているが８とほぼ同様の形態と考えられる。１１は底部を再調整している。１４は底部回転ヘラ削り、１５は底部回転糸切り未調整である。１２・１６は内面黒色処理が施される高台杯である。１２は底部糸切り後ヘラ削り、１６は回転ヘラ削りが施される。９は非内黒の杯である。全面に回転ナデが認められる。

１７は内黒の高杯脚部、１８は手捏ね整形の土器で指頭押捺と粗いヘラ削りが認められる。１９は須恵器長頸瓶の口頸部である。２０・２１は須恵器瓶類の底部と考えられる。２０は底部回転ヘラ削りが認められる。２２は須恵器甕の口頸部、２３は双耳瓶の耳部である。

その他の出土遺物は図９に示した。１はスクレイパーで縄文時代の所産と考えられる。２～４は土錘である。溝を持つタイプ（２）と管状のもの（３・４）が存在する。

図１０はＳＤ０１構築以前に堆積したⅣ層・Ⅴ層出土遺物である。１～１０・１２・１３はⅣ層出土、１１はⅤ層出土である。

１～４はいずれもヘラ削り調整の甕である。１は口縁が短く屈曲し、３は頸部に明瞭な段を持つ。５・６はロクロ整形の内黒杯である。底部は回転ヘラ削りが施される。７・８は底部回転ヘラ削りの須恵器杯である。７には体部下半にも回転ヘラ削りが認められる。９・１０は内面黒色処理を施した高杯脚部である。９は脚端部がハの字状に開く形態である。１２は須恵器甕、１３は羽口片である。

１１はかえりをもつ須恵器蓋で外面は全面にわたって回転ヘラ削りが施されている。その他、Ⅴ層中より弥生中期と考えられる縄文が施された土器片が数片出土したが、細片のため図示できなかった。

これらの出土遺物はいずれも流れ込みによるものであるが、ＳＤ０１構築以前のⅣ層出土土器は概ね８世紀中葉から９世紀前半の所産と考えられる。また、後述するⅣ層下の土坑出土土器も８世紀を中心とした年代が当てられるため、Ⅳ層は８世紀中葉から９世紀前半に堆積したものと考えられる。

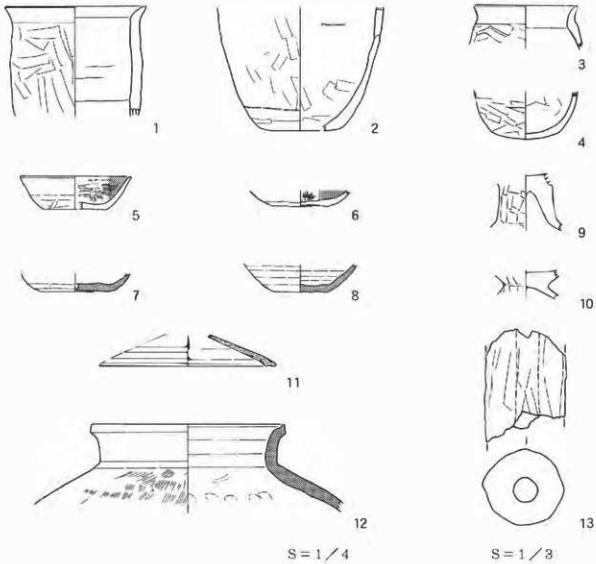


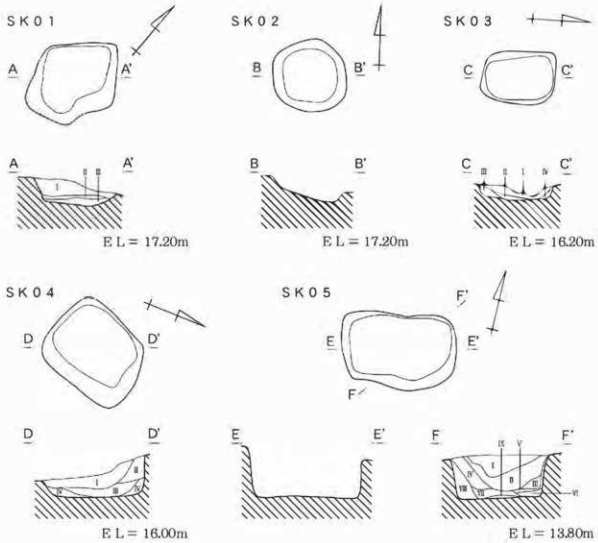
図10　ＳＤ０１Ⅳ・Ⅴ層出土遺物（Ｓ＝１／４・１／３）

Ⅴ層出土の須恵器蓋は７世紀末～８世紀初頭に位置付けられるだろう。

ＳＤ０１および谷を覆うⅡ層出土土器は８世紀中葉から１０世紀代までの土器が混在している。これらは角部内南台遺跡の奈良・平安時代の存続期間を推察させるが、これらの遺物から遺構の年代を決定することは困難と思われる。中世や近世に相当する遺物は確認されていないものの、出土状況を考慮し、Ⅳ層の堆積時期の知見から、ＳＤ０１は平安時代以降に構築されたものとしておく。

ＳＫ０１（図１１）

ＳＤ０１構築以前のⅣ層下より検出した土坑である。長軸９０㎝、深さ約４０㎝ を測る。平面形は検出時には不整であったが、壁面の崩落が考えられ、本来は長方形であったことが推定される。中層にあたるⅡ層より炭化物と焼土ブロックの集中した堆積が認められた。周辺の遺跡の検出例を考慮にいれて、木炭焼成土坑と判断した。土師器片が数片出土したが、細片のため図示し得なかった。ＳＤ０１Ⅳ層等の知見から８世紀代の所産と考えられる。



ＳＫ０１
Ⅰ　暗灰色土　粘性・締り有。炭化物・焼土粒微量。
Ⅱ　赤褐色土　粘性・締り無。炭化物・焼土ブロック主体。
Ⅲ　暗褐色砂質土　粘性・締りやや有。

ＳＫ０３
Ⅰ　暗褐色土　粘性・締りやや有。
Ⅱ　黒色土　粘性・締りやや有。炭化物主体。
Ⅲ　暗褐色土　粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒多量。

ＳＫ０４
Ⅰ　暗褐色土　粘性・締り有。小レキ少量。
Ⅱ　明褐色土　粘性無。締りやや有。小レキ・焼土粒微量。
Ⅲ　黒色土　粘性・締り無。炭化物主体。
Ⅳ　褐色土　粘性・締り無。小レキ微量。焼土粒多量。

ＳＫ０５
Ⅰ　暗褐色土　粘性・締り有。小石少量。炭化物微量。
Ⅱ　暗褐色土　粘性・締り有。炭化物微量。
Ⅲ　暗褐色土　粘性無。締りやや有。焼土粒・炭化物多量。
Ⅳ　黒褐色土　粘性無。締りやや有。褐色粒少量。
Ⅴ　赤色粘土　粘性無。締り有。焼土ブロック。
Ⅵ　赤褐色土　粘性・締り有。焼土粒主体。
Ⅶ　黒色土　粘性・締り無。炭化物主体。
Ⅷ　暗褐色土　粘性・締りやや有。褐色粒多量。
Ⅸ　黄褐色土　粘性・締り無。

図 11　Ａ区検出土坑実測図・断面図（Ｓ＝１／40）

ＳＫ０２（図１１）

ＳＤ０１構築以前のⅣ層下から検出した。Ⅳ層除去時に上位を削平したものと考えられる。平面形は不整円形を示し、長軸約８０㎝を測る。覆土は焼土粒を少量含む黒褐色土を基調としている。遺物は出土しなかった。このことからＳＫ０１と同じく木炭焼成土坑と考えられる。また、形成時期も同じく８世紀代の所産と推察される。

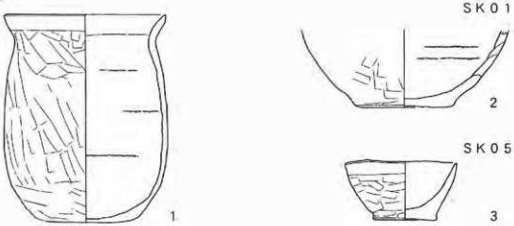


図 12　Ａ区検出土坑出土土器（Ｓ＝１／４）

ＳＫ０３（図１１・１２）

試掘調査時に確認された土坑である。試掘調査時に上部が削平された。平面形は長方形で長軸８０㎝を測る。覆土下層から炭化物・焼土の集中した層位が確認され、壁面に焼成による硬化面が認められた。このことから、木炭焼成土坑と考えられる。

Ｉ層中より図１２－１が出土した。ヘラ削り調整で、体部下位に最大径を持つやや寸胴形の形態の甕である。口縁は横ナデ調整である。８世紀中葉に相当すると考えられる。

ＳＫ０４（図１１）

ＳＤ０１構築以前のⅣ層下より確認した土坑である。長軸約１１０㎝、深さ約４０㎝を測る。平面形は不整長方形である。下層であるⅢ・Ⅳ層より炭化物および焼土粒が集中して確認された。また、壁面は焼成による硬化面が認められた。これらのことから木炭焼成土坑と考えられる。遺物は出土していないが、先述のＳＤ０１Ⅳ層堆積時期の知見から、８世紀代の所産と考えられる。

ＳＫ０５（図１１・１２）

ＳＤ０１構築以前のⅣ層下より確認した土坑である。長軸約１２５㎝、深さ約５０㎝を測る。平面形は長方形である。壁面に沿って、硬化した焼土ブロックの堆積（Ⅴ層）が認められ、土坑内での焼成に伴うものと考えられる。また、下層には焼土粒および炭化物が集中する層位（Ⅵ・Ⅶ層）が認められた。これらのことから、木炭焼成土坑と考えられる。遺物はⅡ層中より図１２－３が出土した。口縁を横ナデし、ヘラ削りが施される鉢である。８世紀代前～中葉の所産と考えられる。

ＳＫ０８～１２（図５）

これらはＳＤ０１構築以前のⅣ層除去後に検出されたが、いずれも掘り込みが浅く、１０㎝程度の深さしかないものである。ＳＫ０１～０５のような木炭焼成土坑と考えられる覆土ではなく、人為的なものであるかどうかも定かではない。風倒木痕等の可能性がある。

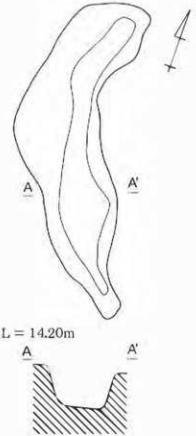


図 13　ＳＸ０１実測図
（Ｓ＝１／60）

ＳＸ０１（図１２・１３）

ＳＤ０１構築以前のⅣ層下より確認した。谷の傾斜変換点付近に掘り込まれた溝状の遺構である。長軸約5.1ｍ、短軸約1.2ｍを測る。覆土は黒褐色土でＳＤ０１Ⅴ層に類似する。焼土粒・炭化物は確認されていない。遺物は図１２－２が出土した。輪積痕を残し、外面ヘラ削りの甕である。丸胴の形態を示すものと考えられる。この出土遺物とⅣ層堆積時期の知見から８世紀代の所産と考えられる。

ＳＸ０３（図１４・１５）

ＳＸ０３はＡ区の北東部に位置する。調査当初、埋没谷覆土と考えた黒褐色土（Ⅰ層）を人力により除去したところ、人為的に斜面を掘削し、平坦部を作り出していることが確認された。この整地した箇所全体をＳＸ０３と名づけ、調査を実施した。

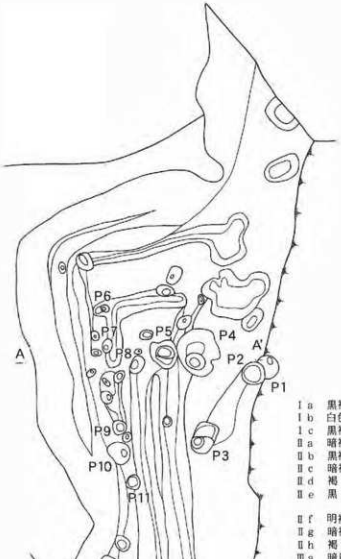
図１４では完掘状況を示してある。長軸１０ｍ以上の整地部が検出された。西側は削平されているが、検出部分では方形を意識して掘削が成されていると考えられる。

掘り込み部底面は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、比高差は約８０㎝ を測る。上位の掘り込み面に平行及び直交する軸で浅い溝が数条確認される。深さは１０㎝ 程度、幅約２０㎝ のものを主とする。また、ピットが多数検出された。ピット番号を示したものは深さ３０㎝ 以上のもので、Ｐ１・４・５は深さ５０㎝ 以上を測る。ピットは西側の壁に沿うものが顕著である。これらは何らかの構築物を形成していたものと推定される。

西側および北側の壁際には幅1.5～２ｍにわたって整地層が確認された。Ⅲ層が該当する。Ⅲ層は上位に砂質粘土を交互に堆積させたもので、締りがよく、掘り込み面に対し鋭角的に立ち上がることから、人為的に形成されたものと考えられる。掘り込み面で確認されるピットや浅い溝はこの整地層からは外れて検出されるものである。

また、掘り込み面下層にはピットや溝は埋めるⅡ層がほぼ全面にわたって確認された。Ⅱ層も締りが極めてよく、すべてのピットや溝は人為的に埋められたものと考えられる。ＳＤ０１Ⅱ層に類似するⅠ層は遺構廃棄後の自然堆積層であり、Ⅰ層除去後のⅡ層上面は畝状の高まりが確認された。また、Ｐ４覆土には炭化物が微量ながら集中している層位（Ⅱｄ層）が確認された。

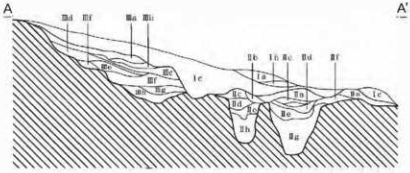
出土遺物はⅠ層からの出土が多く、Ⅱ層以下からはほとんど出土しなかった。図１５に示す１～４はⅠ層、５はⅡ層からの出土である。１はロクロ整形の内黒杯である。口縁はわずかに外反し、やや椀状を呈す。体部下端にヘラ削り、底部は回転ヘラ削りが施される。２は土師質土器高台付の皿底部である。４は須恵器高台杯である。高台高は６㎜ と低く、底面は中央がややふくらみを持つ形態で、回転ヘラ削りが施される。５は管状土錘である。その他、鉄滓がわずかながら出土した。



S＝１／100

Ⅰa　黒褐色土　褐色粒微量。
Ⅰb　白色砂質粘土
Ⅰc　黒褐色土　褐色粒・遺物少量。
Ⅱa　暗褐色土　粘土ブロック少量。
Ⅱb　黒褐色土　褐色粒微量。
Ⅱc　暗褐色土　粘土ブロック少量。
Ⅱd　褐　色　土　褐色土ブロック主体。
Ⅱe　黒　色　土　褐色土ブロック多量、炭化物微量。
Ⅱf　明褐色土
Ⅱg　暗褐色土　褐色土ブロック多量。
Ⅱh　褐　色　土　褐色土ブロック主体。
Ⅲa　暗灰色砂質粘土
Ⅲb　黒　色　土　粘土ブロック少量。
Ⅲc　白色砂質粘土
Ⅲd　暗褐色土　褐色粒少量。
Ⅲe　暗褐色土　褐色土ブロック少量。
Ⅲf　黒褐色土　褐色土ブロック少量。
Ⅲg　暗褐色土　褐色土ブロック少量。
Ⅲh　暗褐色土　褐色土ブロック多量。

ＥＬ＝21.60m



S＝１／60

図 14　ＳＸ０３実測図・断面図（Ｓ＝１／100・１／60）

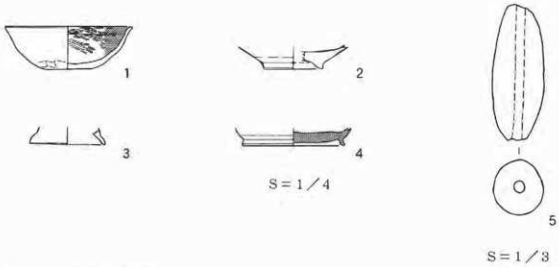


図 15　ＳＸ０３出土遺物（Ｓ＝１／４・１／３）

これらの出土遺物は８～１０世紀のものとすることができるが、流れ込みの可能性が高く、本遺構の時期を決定付けるものではない。中・近世に相当する遺物は出土していない。本遺構廃絶後の堆積であるＩ層はＳＤ０１にほぼ対応するものと考えられる事から、ＳＤ０１と同様、平安時代以降の所産と推定される。

また、この遺構の性格は不明であるが、整地前の完掘状況は竪穴住居址の荒掘りに類似している。住居廃絶後、整地が行われ、平坦部を作り出した可能性が指摘できよう。これに従えば、浅い溝状遺構は住居址周溝と推定され、また複数列存在することから、住居址は重複するか、拡張していたものと考えられる。また、鉄滓や炭化物が若干認められる事から、製鉄・鍛冶関連遺構の可能性も指摘されよう。

第２節　Ｂ　　区

Ｂ区は標高約２７ｍを測り、Ａ区より上位に位置する。北東方向に傾斜する支谷の谷頭に位置する。表土を除去した段階でＳＤ０２・ＳＸ０２付近から北東方向に黒褐色砂質シルトおよび暗灰色砂質シルトが堆積している状況が確認された。これらには炭化物や焼土粒を含む遺物包含層であることから、グリットを設定し、調査を実施した。

確認された遺構は溝１条（ＳＤ０２）、土坑２基（ＳＫ０６・０７）、性格不明遺構１基（ＳＸ０２）のほかピットが数基である。確認面は青灰色シルト面である。

ＳＤ０２（図１７・１９）

ＳＤ０２は谷の傾斜に合わせて、弧状に構築された溝である。Ｂ区遺物包含層を除去したところ、

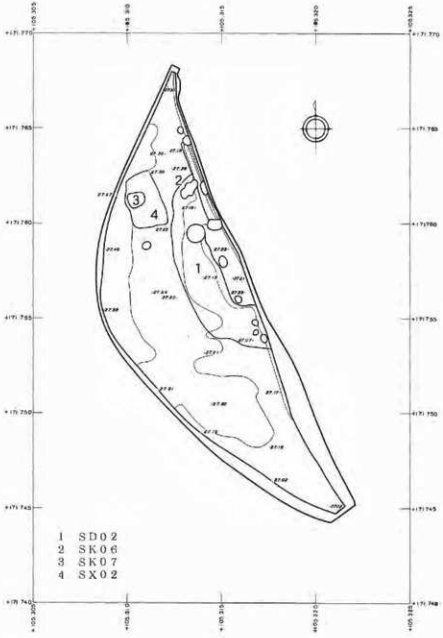


図 16　Ｂ区全体図（Ｓ＝１／２００）

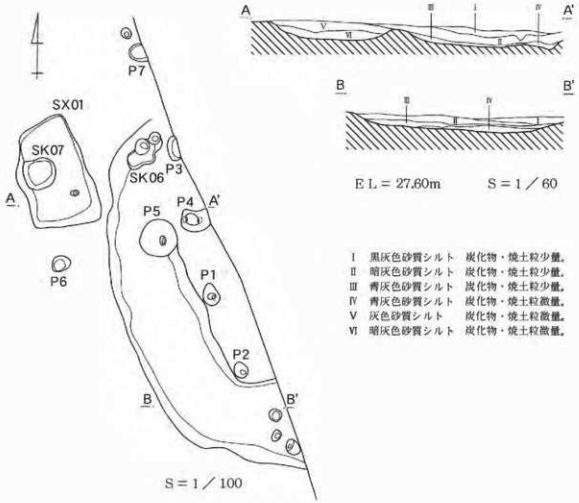
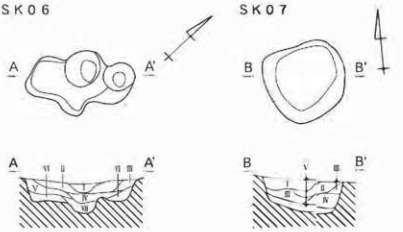


図17　ＳＤ０２・ＳＸ０２実測図・断面図（Ｓ＝１／100・１／60）

溝状を呈すことが明らかとなった。検出範囲は約９ｍ、溝幅は約2.1ｍである。深さは２０～３０㎝の浅いものである。確認面上位よりの掘り込みが確認されるため、本来は３ｍ以上の幅があったものと考えられる。

覆土堆積状況より、方形の土坑状の遺構であるＳＸ０２を切って構築されていることが確認されている。覆土は焼土粒・炭化物を含む砂質シルトであるが、Ｂ区全体が同様の層位を呈している。周辺において、何らかの焼成行為が行われていた事を推察させる。また、これらは砂質を基調とすることから、流水の影響を受けて堆積したものであると考えられる。

出土遺物は摩滅しているものが多く、ほとんどが小破片であり、復元率も低い。これらは流れ込みである可能性が高い。図１９の１～１１がＳＤ０２より出土したものである。１はロクロ整形の甕である。２は底部～体部中位までヘラ削りが施される杯である。平底で内湾気味に立ち上がり、口縁は緩く外反する。摩滅が激しくロクロ整形か否か明確ではない。３は底部糸切り未調整、体部下半ヘラ削りが施される椀形の杯である。内面は黒色処理が施される。４・５・７～１０は内黒杯で９は底部糸切り後ヘラ削りが認められ、その他は回転ヘラ削りが施される。４・５は内湾気味に立ち上がる形態である。６は底面回転ヘラ削りで椀状杯になると考えられる。１１は須恵器長頸瓶の口頸部である。９世紀以降の遺物が主体的といえるだろう。



SK06

Ⅰ	暗灰色砂質土	粘性・締り無。炭化物・焼土粒・黄白色粘土粒微量。
Ⅱ	黒褐色シルト	粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒・黄白色粘土粒少量。
Ⅲ	暗灰色砂質土	粘性・締りやや有。炭化物・黄白色粘土粒微量。
Ⅳ	黒褐色シルト	粘性・締りやや有。炭化物少量。黄白色粘土粒多量。
Ⅴ	暗灰色砂質土	粘性・締り有。炭化物・焼土粒多量。
Ⅵ	暗灰色砂質シルト	粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒少量。
Ⅶ	暗灰色砂質土	粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒微量。

SK07

Ⅰ	暗褐色シルト	粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒少量。
Ⅱ	黒灰色シルト	粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒・黄白色粘土少量。
Ⅲ	黒灰色シルト	粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒多量。
Ⅳ	暗褐色シルト	粘性・締りやや有。炭化物・焼土粒少量。
Ⅴ	黒灰色シルト	粘性有。締りやや有。炭化物・焼土粒少量。

図18　B区検出土坑実測図・断面図（S＝1／40）

この出土遺物とＳＸ０２との重複関係から、ＳＤ０２および遺物包含層は平安時代以後に埋没したものと考えられる。

ＳＸ０２（図１７・１９）

ＳＸ０２はＳＤ０２およびＳＫ０７に切られる土坑状の遺構である。平面形は長方形で長軸約２.８m、短軸約１.８m、深さ約３０cmを測る。覆土は灰色・暗灰色砂質シルトを基調とする。炭化物・焼土粒を含んでいるが、ＳＤ０２およびＢ区全体の覆土と同じく、流水の影響により二次堆積したものと考えられる。

図１９の１４～１６が出土した遺物である。１４は内面黒色処理が施される高台付椀である。口縁は緩く外反し、摩滅が激しいが底部は再調整が施されていると考えられる。１０～１１世紀代に位置付けられるだろうか。１５は糸切り未調整の内黒杯、１６は底部ヘラ削りの杯である これらの遺物は本遺構に直接的に伴うものではないが、９世紀後半～１１世紀の時期を示すものと考えられる。

ＳＫ０６（図１８・１９）

ＳＫ０６はＳＤ０１と重複して確認された土坑である。前後関係は不明である。長軸約１.１m、深さ約３０cmを測る。土坑にピットが重複した可能性がある。

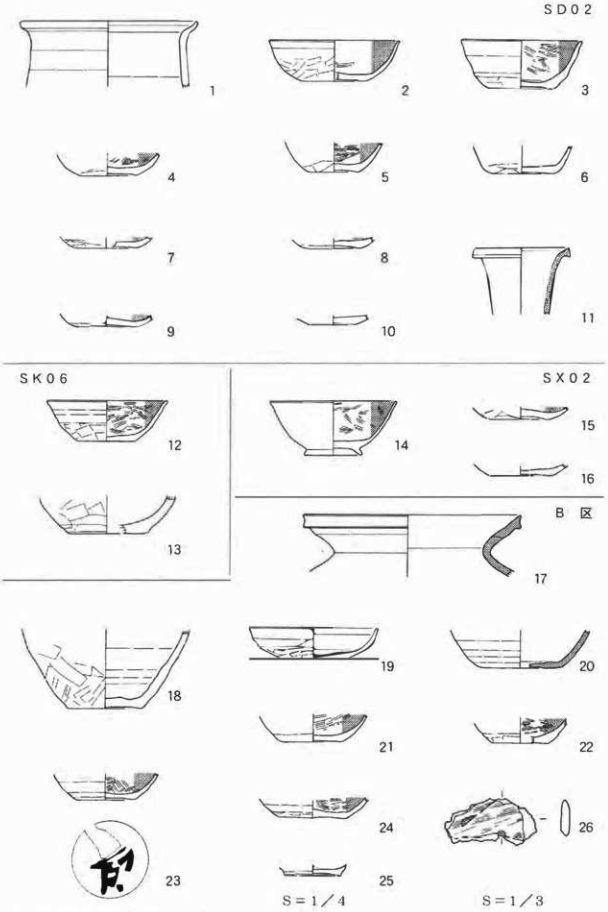


図19　B区出土遺物（S＝1／4・1／3）

覆土はＢ区全体の土層と同じく、焼土粒・炭化物を含むものである。砂質土に挟まれて黒褐色シルト（Ⅱ・Ⅳ層）が観察される。壁面の硬化や焼土ブロックや炭化物主体層は認められず、木炭焼成土坑とは考えにくい。

出土遺物は図１９の１２・１３が出土した。１２はロクロ整形の内黒杯である。底径5.8㎝、底径・口径比は0.45である。底部は回転糸切りを一部残し、粗い再調整が施される。１３はヘラ削り調整の甕底部である。これらの出土遺物から９世紀後半の所産と考えられる。

ＳＫ０７（図１８）

ＳＫ０７はＳＸ０２を切って構築された土坑である。平面形は不整円形を示し、長軸約９０㎝ を測る。覆土は焼土粒・炭化物を含むが砂質ではなく、シルト質の土層を基調とする。壁面は焼成による硬化部分は認められず、炭化物等が主体となる層位も確認されなかったことから、木炭焼成土坑ではないものと判断される。

遺物は少量の土師器片が出土したが、図示できるものは認められなかった。ＳＸ０１との重複関係から平安時代以降の所産と考えられる。

ピット（図１７）

Ｂ区からはＳＤ０２覆土と類似する遺物包含層除去後にピットが検出された。Ｐ３・４・７は調査区壁面の土層観察より、遺物包含層下に構築されていることが確認されている。ＳＫ０６はこれらと同様のピットと重複しているものと考えられる。深さはＰ１・２・５が約５０㎝、Ｐ３・４・６・７が約３０～４０㎝ を測る。Ｐ１～４・７は直線的に並ぶことから何らかの構築物を形成していた可能性がある。遺物は少量の土師器片が出土したが、図示し得なかった。検出状況等により平安時代以降の所産と考えられる。

Ｂ区遺物包含層出土遺物（図１９）

Ｂ区は遺構上位に遺物包含層が確認されている。ここからは比較的多量の遺物が出土した。だが、これらも小破片が中心であり、流れ込みの可能性がある。図１９の１７～２６が相当する。

１７は須恵器甕の口頸部である。１８はロクロ整形の甕底部で体部下半にヘラ削りが施される。１９はロクロ整形の杯で器高が低く、体部中位より屈曲する形態である。外面体部下半には粗いヘラ削りが施される。底部は回転ヘラ削りが認められる。２０は須恵器杯で底部回転ヘラ削り調整である。２１～２４はいずれもロクロ整形の内黒杯で体部下位から底部は回転ヘラ削りが施される。２３は判読不明であるが墨書が認められる。２５は高台が付く底部で椀形になると考えられる。内面に黒色処理は認められない。２６は石庖丁の破片である。

これらの出土遺物は９世紀以降の所産と考えられ、ＳＤ０２・ＳＸ０２等の遺構出土遺物とほぼ同様であると言えるだろう。

第３節　その他の遺物

一括出土遺物（図２０）

表土を除去する段階で得られた遺物と試掘調査で出土した遺物を図２０に示す。１・３は本調査Ａ区に位置するトレンチから出土した遺物である。２はＢ区東の７Ｔから出土した遺物である。４～８はＡ区表土掘削時に得られた遺物である。

１は口縁が短く屈曲する丸胴形甕でヘラ削り調整が施される。２はロクロ整形の鉢で口縁が強く外反し、体部中位が大きく膨らむ。内面はミガキ調整で黒色処理が施される。３は平底風丸底の杯で口縁横ナデ、内面はミガキ、黒色処理が施される。４は須恵器で短頸壺とセットになる蓋と考えられる。天井部に回転ヘラ削りを施し、ほぼ平坦に成形しており、ほぼ垂直に屈曲して、口縁はほぼ真下に下がる。５は須恵器杯で、底部回転ヘラ削りが施される。６は須恵器甕と考えられる底部で体部下半にわずかにヘラ削りが認められる。

７は羽口の端部である。８は管状土錘で小形の部類に位置付けられる。

２の鉢は９世紀代に位置付けられる。これにより、７Ｔで確認された遺物包含層はＢ区とほぼ同時期であることが認められ、同一の遺物包含層と考えられよう。Ａ区およびＡ区相当トレンチより出土した遺物は８世紀中葉～９世紀にかけての遺物が中心であるといえる。その他、遺構内外より弥生時代中期に相当する土器が数片出土したが、図示することはできなかった。また、鉄滓は主にＡ区からの出土で総重量１０.８kg を測る。

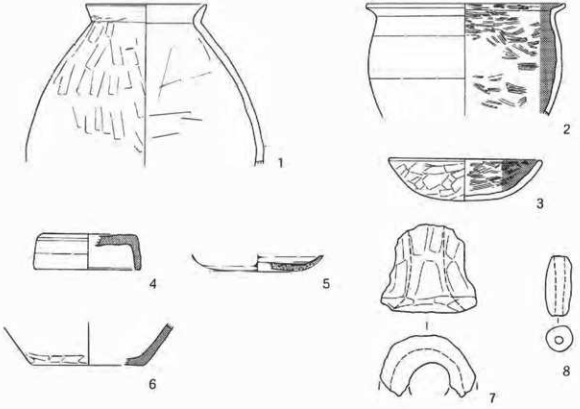
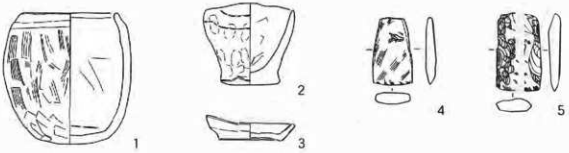


図20　その他の出土遺物（S＝１／４・１／３）

参考資料（図21）

図２１は中野義政氏、中野重良氏が角部内南台遺跡より表採した遺物である。参考資料として図示した。

１は土師器甕である。粗い刷毛目が施され、口縁に横ナデが施される。栗囲式である。２は外面に指頭押捺と粗いヘラ削りが認められる。輪積痕を顕著に残す。内面はヘラ削り後ナデ調整である。３は土師質土器で内外面回転ナデ、底部に回転糸切りを残す。体部中位よりやや屈曲し、内湾気味に立ち上がる形態を示す。４・５は扁平片刃石斧である。弥生時代の所産と考えられる。



S＝1／4　　S＝1／3

図21　参考資料（S＝1／4・1／3）

第3章 ま と め

今回の調査で確認されたのは主に奈良・平安時代の遺構・遺物であり、縄文時代の遺物はほとんど検出されなかった。縄文時代の生活痕跡は主に東の貝層付近に存在し、本調査区周辺までは広がらないものと考えられる。

弥生時代の遺物も若干の土器と石庖丁の破片が出土しただけである。しかしながら、過去の記録や表採資料には弥生時代に相当する石器が出土していることから、角部内南台遺跡に弥生時代の遺構が存在することが予測される。

Ａ区では７世紀末から８世紀前半に相当する遺物が出土しており、遺構等は検出されなかったが、角部内南台遺跡の古代の初現は、現在のところ、この時期に考えられる。遺構が確実に認められるのは８世紀中葉～後半にかけての木炭焼成土坑（ＳＫ０１～０５）からである。Ａ区からは主にこの時期以降の土器が出土しており、Ｂ区ではやや遅れて９世紀代以降の土器が主体的である。１０～１１世紀まで下ると考えられる土器も出土しており、本遺跡の存続期間を示すものといえるだろう。

木炭焼成土坑は谷部の傾斜面に緩慢に分布しているものであり、わずかながら羽口が出土していることや鉄滓も約１０.８kg 出土していることから、本遺跡が製鉄および鍛冶に関連した性格をもつことを伺わせる。また、Ｂ区の遺物も流れ込みと考えられるものではあるが、Ａ区より出土遺物の量が多く、土層には焼土や炭化物を多く含む特徴的なものであった。Ｂ区が谷頭である北東側に傾斜する谷に面して９世紀以降の製鉄・鍛冶関連遺構が存在していたものと推定される。

また、Ａ区は９世紀までに谷が埋没したと考えられ、その後、蛇行する溝（ＳＤ０１）が掘削されたと考えられる。この溝は湧水点まで掘り込む箇所があり、谷において水を利用するための施設と考えたい。

本調査区からはＡ区のＳＸ０３が住居址を壊して構築された可能性があるだけで、明確に住居址を検出できなかった。しかし、台地平坦面は削平がなされており、本来は住居址が存在していた可能性が高い。北に隣接する角部内北台遺跡でも土師器・須恵器が濃密に分布していることから、台地平坦面全体に当該期の遺構が展開していたものと推察される。

また、本調査で出土した大小の形態を呈す土錘や製塩土器と考えられている筒形土器は臨海部に位置するという立地条件を考慮すると、本遺跡における製鉄・鍛冶関連以外の特徴の一端を示唆するものと言えるだろう。

引用・参考文献

会津若松市教育委員会（1994）「会津大戸窯 遺物編」

小高町（1975）「小高町史」

小高町教育委員会（1988）「角部内南台東貝塚」

竹島国基編（1992）「桜井」竹島コレクション考古図録第３集

楢葉町教育委員会（1997）「赤粉遺跡」

能登谷宣康（1998）「第２編 北向Ａ遺跡 第３章 まとめ」『請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅴ 掘込遺跡 北向Ａ遺跡』

福島県教育委員会（1991）「福島県の貝塚」

福島県教育委員会（1998）「福島県内遺跡分布調査報告４」

福島県教育委員会（1991・1994・1995・1996・1998・1999）「請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ」

福島県教育委員会 ㈶福島県文化センター 地域振興整備財団（1989・1996・1997）「相馬地域開発関連遺跡調査報告Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ」

福島県教育委員会 ㈶福島県文化センター ㈱東北電力（1995）「原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ・Ⅵ」

福島県教育委員会 ㈶福島県文化センター（1986・1988）「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ・Ⅳ」

出土遺物観察表

表2　出土土器観察表

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
8−1	土師器 甕	(17.8) — —	外面口縁横ナデ、体部ハケ目。内面ナデ。	密 小石	にぶい黄白色	SD01
8−2	土師器 甕	(22.7) — —	内外面口縁横ナデ。外面体部回転ナデ。内面ヘラ削り後ナデ。	密 小石	にぶい橙褐色	SD01
8−3	土師器 甕	(10.4) 11.0 7.8	外面粗いヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。底部木葉痕。	やや粗 砂粒・小石	橙褐色	SD01
8−4	土師器 甕	(15.1) — —	外面口縁横ナデ、体部ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	やや粗 砂粒・小石	赤褐色	SD01
8−5	土師器 筒形土器	8.0 7.2 9.0	外面口縁・底部・内面ナデ。外面体部指頭押圧、ナデ。内外面輪積痕。	やや粗 小石・白色針状物質	赤褐色	SD01
8−6	土師器 甕	— — 8.2	外面ヘラ削り。内面ナデ。底部木葉痕。	密 小石	にぶい褐色	SD01
8−7	土師器 杯	(13.8) 3.8 (6.4)	外面体部上位ナデ、下位ヘラ削り。底部手持ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 にぶい黄褐色 内 黒色	SD01
8−8	土師器 杯	(13.0) 4.8 (5.2)	外面回転ナデ。底部糸切り未調整。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 にぶい黄褐色 内 黒色	SD01
8−9	土師質土器 杯	(13.0) — —	外面回転ナデ。内面ミガキ。	密 小石	にぶい褐色	SD01
8−10	土師器 杯	(13.6) — —	外面回転ナデ。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石	外 橙褐色 内 黒色	SD01
8−11	土師器 杯	— — (9.0)	外面回転ナデ。内面ミガキ、黒色処理。底部手持ヘラ削り。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SD01
8−12	土師器 高台杯	— — (8.2)	外面回転ナデ。内面ミガキ、黒色処理。底部糸切り後全面手持ヘラ削り。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい黄灰色 内 黒色	SD01
8−13	土師器 杯？	— — 5.8	外面ヘラ削り後ナデ。底部糸切り後手持ヘラ削り。内面ナデ。	緻密 小石・白色針状物質	外 にぶい橙褐色 内 黒灰色	SD01
8−14	土師器 杯	— — 8.4	外面上位回転ナデ、下位・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SD01
8−15	土師器 杯	— — 6.5	内外面回転ナデ。底部糸切り未調整。	緻密 白色針状物質	にぶい赤褐色	SD01
8−16	土師器 高台杯	— — 9.6	台部内外面回転ナデ。底部回転ヘラ削り。杯部内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい黄褐色 内 黒色	SD01
8−17	土師器 高杯	— — —	外面粗いヘラ削り。杯部内面ミガキ、黒色処理。脚部内面ヘラ削り、ナデ。	緻密	外　にぶい褐色 内　黒色	SD01

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
8−18	土師器 杯	(4.8) 3.7 (5.3)	外面ヘラ削り、指ナデ。内面ナデ。	密 砂粒・小石	にぶい黄褐色	SD01
8−19	須恵器 瓶類	(14.0) — —	内外面回転ナデ。	緻密	暗灰色	SD01
8−20	須恵器 瓶類	— — (9.2)	内外面回転ナデ。底部回転ヘラ削り。	緻密	暗灰色	SD01
8−21	須恵器 瓶類	— — 8.2	内外面ナデ。	緻密	青白色	SD01
8−22	須恵器 甕	— — —	外面櫛描波状文、ナデ。内面ナデ。	緻密 小石・白色粒	灰色	SD01
8−23	須恵器 双耳瓶	— — —	耳部ヘラ削り・指ナデ。内面指頭押圧・ナデ。	緻密	暗灰色	SD01
10−1	土師器 甕	(15.1) — —	外面口縁横ナデ、体部ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒	黄白色	A区 Ⅳ層
10−2	土師器 甕	— — (8.0)	外面ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	密 小石	暗褐色	A区 Ⅳ層
10−3	土師器 甕	(11.0) — —	外面口縁横ナデ、体部ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒・小石	黒褐色	A区 Ⅳ層
10−4	土師器 甕	— — 7.0	外面ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒・小石	外 橙褐色 内 黒灰色	A区 Ⅳ層
10−5	土師器 杯	(12.0) 3.5 6.8	外面口縁〜体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ・黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	A区 Ⅳ層
10−6	土師器 杯	— — (5.8)	外面体部上位回転ナデ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・小石	外 にぶい黄褐色 内 黒色	A区 Ⅳ層
10−7	須恵器 杯	— — (10.0)	外面体部上位回転ナデ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面回転ナデ。	緻密 砂粒	灰白色	A区 Ⅳ層
10−8	須恵器 杯	— — (5.9)	内外面回転ナデ。底部回転ヘラ削り。	緻密 砂粒	青灰色	A区 Ⅳ層
10−9	土師器 高杯	— — —	外面粗いヘラ削り。杯部内面ナデ、黒色処理。脚部内面ヘラ削り。	密 砂粒・小石	外 黄白色 内 黒色	A区 Ⅳ層
10−10	土師器 高杯	— — —	外面粗いヘラ削り。杯部内面ナデ、黒色処理。脚部内面ヘラ削り、ナデ。	密 小石	外 橙褐色 内 黒色	A区 Ⅳ層
10−11	須恵器 蓋	(19.0) — —	外面回転ヘラ削り。内面回転ナデ。	緻密 白色針状物質	青灰色	A区 Ⅴ層

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
10−12	須恵器 甕	(20.4) — —	内外面口縁回転ナデ。外面体部タタキ。内面ナデ、指頭押圧。	緻密 小石	外 青灰色 内 灰白色	A区 Ⅳ層
12−1	土師器 甕	17.0 16.9 10.2	内外面口縁横ナデ。外面体部・底部ヘラ削り。内面体部ナデ、輪積痕。	密 砂粒・小石	外 暗褐色 内 にぶい黄白色	SK01
12−2	土師器 甕	— — (6.5)	外面ヘラ削り。底部木葉痕。内面ナデ、輪積痕。	やや粗 砂粒・小石	外 黄白色 内 にぶい黄褐色	SX01
12−3	土師質土器 鉢	11.8 6.2 6.6	外面口縁・内面横ナデ。外面体部ヘラ削り。底部木葉痕。	密 砂粒・小石・白色針状物質	にぶい暗褐色	SK05
15−1	土師器 杯	(13.6) 4.5 5.0	外面口縁〜体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ。	緻密 砂粒	外 黄白色 内 黒色	SX03
15−2	土師器 高台杯	— — (6.4)	外面回転ナデ。内面ナデ。	緻密	にぶい黄褐色	SX03
15−3	土師器 高台杯	— — 8.2	内外面回転ナデ。	密 砂粒・小石	黒褐色	SX03
15−4	須恵器 高台杯	— — 10.9	外面回転ナデ。内面ナデ。底部外面回転ヘラ削り。	緻密 小石	青灰色	SX03
19−1	土師器 甕	(18.8) — —	内外面口縁横ナデ。外面体部回転ナデ。内面ナデ。	密 砂粒	にぶい褐色	SD02
19−2	土師器 杯	(14.0) 4.3 6.8	内外面口縁横ナデ?外面体部ヘラ削り。底部手持ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石	外 にぶい褐色 内 黒色	SD02
19−3	土師器 椀	(13.0) 5.1 7.0	外面体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部糸切り未調整。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SD02
19−4	土師器 杯	— — (5.8)	外面体部上位回転ナデ、体部下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SD02
19−5	土師器 杯	— — (5.2)	外面体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密	外 黄白色 内 黒色	SD02
19−6	土師質土器 杯	— — (7.0)	外面体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ナデ。	緻密	にぶい褐色	SD02
19−7	土師器 杯	— — (6.8)	外面・底部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石・白色針状物質	外 褐色 内 黒色	SD02
19−8	土師器 杯	— — (5.8)	外面ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SD02
19−9	土師器 杯	— — (6.8)	外面回転ヘラ削り。底部糸切り後手持ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SD02

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
19−10	土師器 杯	— — 4.8	外面・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 灰白色 内 黒色	SD02
19−11	須恵器 瓶類	(10.0) — —	内外面回転ナデ。	緻密 白色針状物質	灰褐色	SD02
19−12	土師器 杯	12.8 3.3 5.8	外面口縁〜体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部糸切り後手持ヘラ削り一部未調整。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 暗褐色 内 黒色	SK06
19−13	土師器 甕	— — (7.4)	外面・底部ヘラ削り。内面ナデ。	緻密 小石	黄白色	SK06
19−14	土師器 高台椀	13.2 5.7 6.2	外面回転ナデ。内面ミガキ、黒色処理。底部ナデ?	密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	SX02
19−15	土師器 杯	— — 6.4	外面ヘラ削り。底部糸切り未調整。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SX02
19−16	土師器 杯	— — 6.9	内外面ナデ。底部手持ヘラ削り。	緻密 白色針状物質	黄白色	SX02
19−17	須恵器 甕	(12.4) — —	外面口縁〜頸部回転ナデ、体部タタキ。内面ナデ。	緻密	灰白色	B区
19−18	土師器 甕	— — 8.0	外面・底部ヘラ削り。内面回転ナデ。	緻密	にぶい黄褐色	B区
19−19	土師器 杯	(13.6) 3.2 7.0	外面口縁〜体部上位回転ナデ、体部下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ナデ。	緻密	にぶい黄褐色	B区
19−20	須恵器 杯	— — (8.8)	内外面回転ナデ。底部回転ヘラ削り。	緻密	灰白色	B区
19−21	土師器 杯	— — 6.2	外面体部上位回転ナデ、体部下位〜底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 砂粒・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	B区
19−22	土師器 杯	— — (6.0)	外面体部上位回転ナデ、体部下位〜底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	B区
19−23	土師器 杯	— — 6.2	外面体部上位回転ナデ、体部下位〜底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 白色針状物質	外 にぶい黄褐色 内 黒色	B区 墨書
19−24	土師器 杯	— — (6.8)	外面体部上位回転ナデ、体部下位〜底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石	外 黄褐色 内 黒色	B区
19−25	土師器 高台椀?	— — 5.8	内外面回転ナデ。	緻密 小石	外 黒褐色 内 暗褐色	B区
20−1	土師器 甕	(12.8) — —	内外面口縁横ナデ。外面体部ヘラ削り。内面体部ヘラ削り後ナデ。	密 小石	外 にぶい褐色 内 褐色	19T

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
20−2	土師器 鉢	(21.0) — —	外面口縁横ナデ。外面体部回転ナデ。内面ミガキ、黒色処理。	緻密	外 にぶい褐色 内 黒色	7T
20−3	土師器 杯	(16.4) 4.4 (6.0)	外面口縁横ナデ、体部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 褐色 内 黒色	10T
20−4	須恵器 蓋	(11.4) 3.7 (10.4)	外面天井部回転ヘラ削り。内外面回転ナデ。	緻密	灰色	A区
20−5	須恵器 杯	— — (8.4)	内外面回転ナデ。底部回転ヘラ削り。	緻密 砂粒	青灰色	A区
20−6	須恵器 甕?	— — (12.1)	外面体部下位ヘラ削り。内外面回転ナデ。底部ヘラ削り。	緻密 砂粒	青灰色	A区
21−1	土師器 甕	12.6 14.4 7.3	外面口縁横ナデ、体部上位ハケ目、体部下位〜底部ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。	密	暗褐色	表採
21−2	土師器 鉢	10.0 9.0 6.6	外面ヘラ削り・指頭押圧。底部木葉痕。内面ヘラ削り・ナデ。	粗 小石	にぶい橙褐色	表採
21−3	土師質土器 小皿	9.8 2.6 7.0	内外面回転ナデ。底部回転糸切り未調整。	緻密 砂粒	赤褐色	表採

表3　出土土製品・石器観察表

挿図番号	分類 用途	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
9−1	スクレイパー	8.9	5.1	2.9	151	SD01 チャート
9−2	土錘	7.3	2.7	—	44	SD01 完形
9−3	土錘	7.6	3.5	—	83	SD01 完形
9−4	土錘	3.8	1.3	—	6	SD01 一部破損
10−13	羽口	9.0	6.4	—	—	A区Ⅳ層 破損
15−5	土錘	10.7	4.3	—	193	SX03 完形
19−26	石鋸丁	7.4	3.5	0.7	—	B区 破損 粘板岩
20−7	羽口	6.9	7.6	—	—	A区 破損
20−8	土錘	4.6	2.1	—	32	A区 完形
21−4	扁平片刃石斧	5.5	3.3	0.9	27	完形 粘板岩
21−5	扁平片刃石斧	6.4	3.1	1.0	28	完形 緑泥片岩

写 真 図 版

角部内南台遺跡全景（南から）

A区調査前（北から）

図版2

ＳＤ０１（南から）

ＳＤ０１（北から）

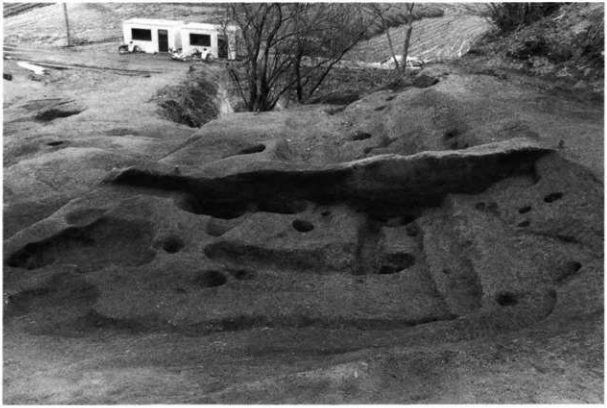
ＳＤ０１（北から）

ＳＤ０１（北から）

ＳＤ０１ピット検出状況（南から）

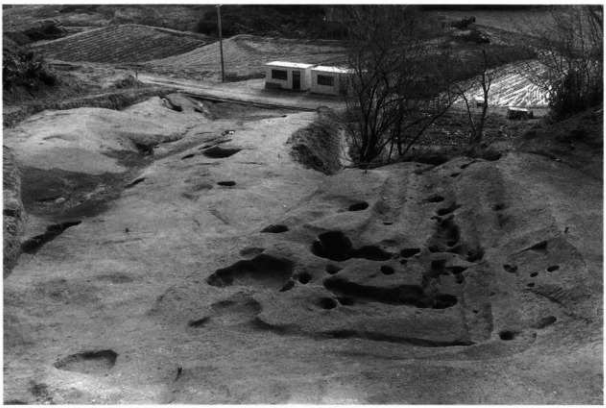
ＳＤ０１ＢＢ'断面

ＳＸ０３　Ⅰ層除去状況



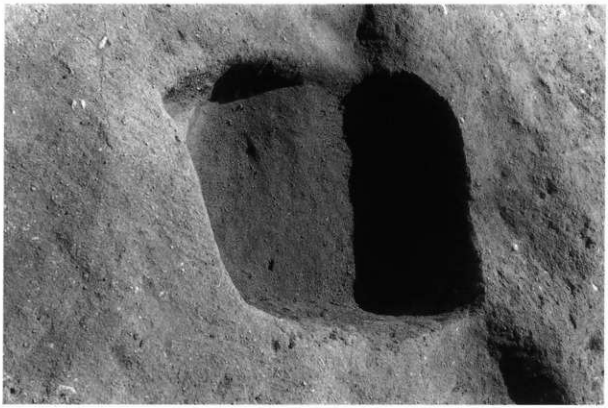
ＳＸ０３断面

図版6



ＳＸ０３完掘状況（北から）

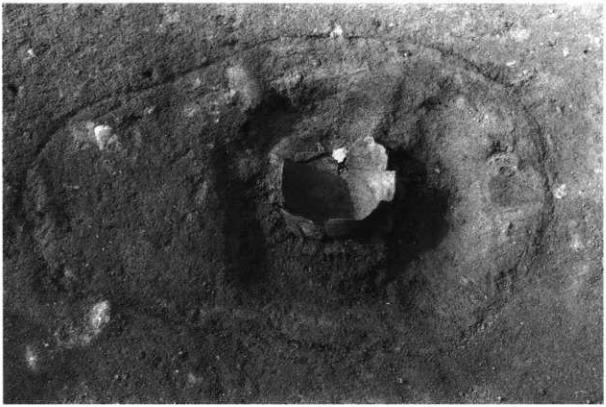
ＳＸ０３完掘状況（東から）



ＳＫ０２

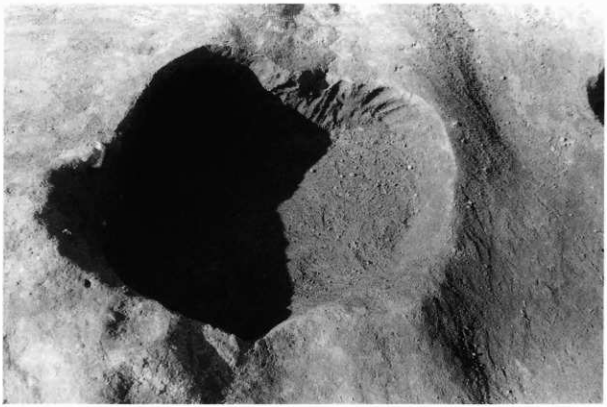
ＳＫ０３・０４調査状況

図版8

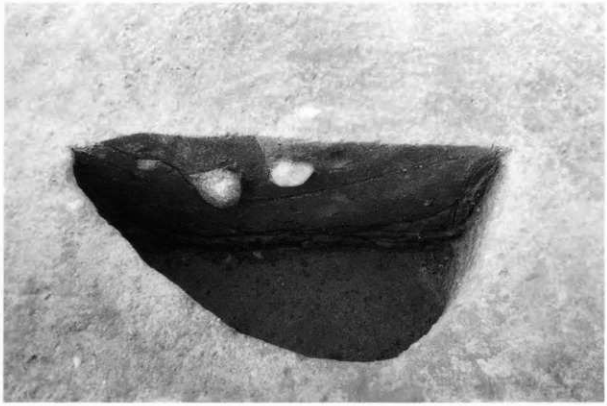


ＳＫ０３土器出土状況

ＳＫ０４半截状況



ＳＫ０４完掘状況



ＳＫ０５半截状況

図版10

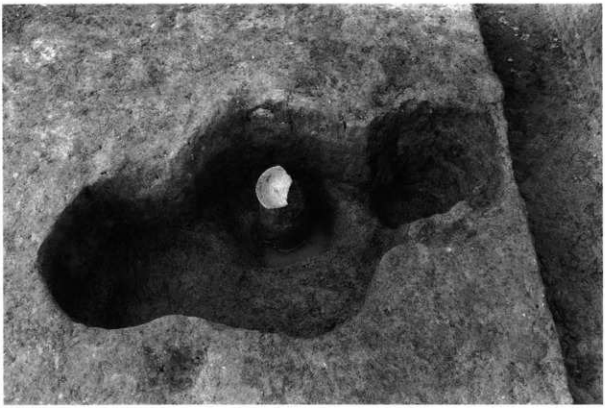
ＳＫ０５土器出土状況

調査風景

B区全景（北西から）

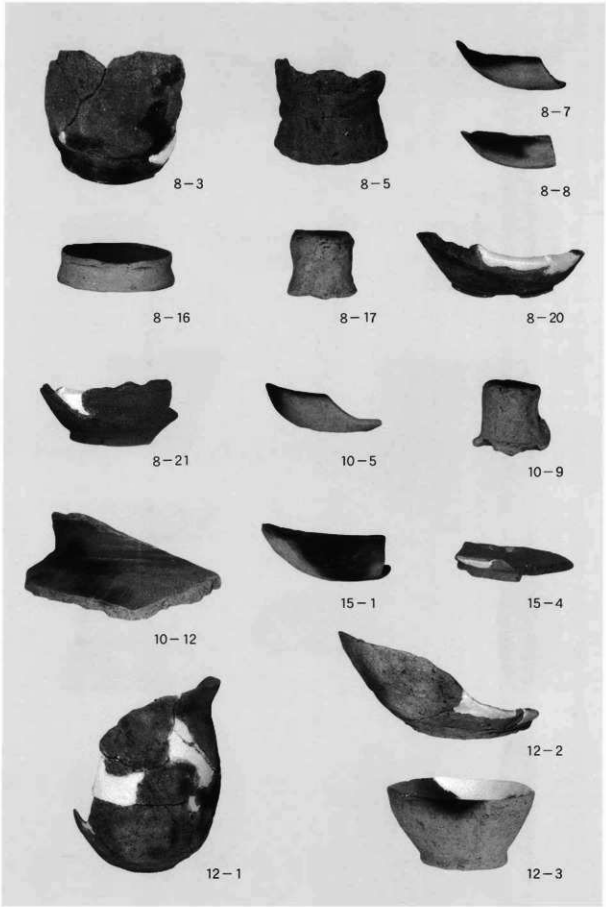
ＳＤ０２（西から）

図版12

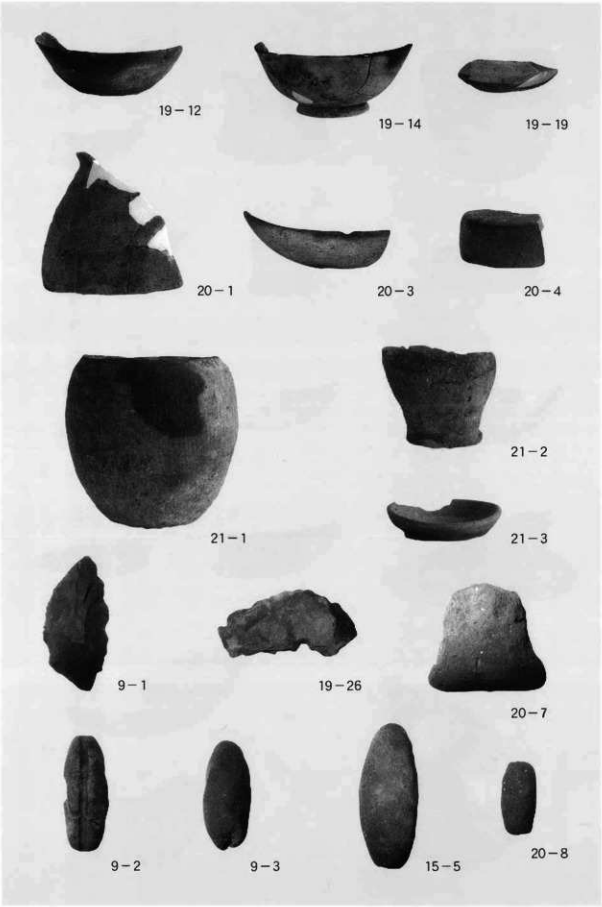


ＳＫ０６土器出土状況

ＳＫ０７半截状況



出土遺物1



出土遺物2

報告書抄録

ふりがな	つのべうちみなみだいいせき
書名	角部内南台遺跡
シリーズ名	小高町文化財調査報告書
シリーズ番号	第３集
編著者名	川田強
編集機関	福島県相馬郡小高町教育委員会教育総務課
所在地	〒979-2111　福島県相馬郡小高町仲町二丁目 82 番地
発行年月日	２００１．３．３０

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡				
つのべうちみなみだいいせき 角部内南台遺跡	おだかまちつのべうちかんまえ 小高町角部内字神前北 ・みなみだい ・南台	07563	95	37°32′29″	141°01′29″	1161	研修センター

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
角部内南台遺跡	貝塚・散布地	奈良～平安	土坑・溝址	土師器・須恵器・鉄滓・土錘	木炭焼成土坑

小高町文化財調査報告書第３集

角部内南台遺跡

2001年3月　発行

発　行　福島県相馬郡小高町教育委員会
福島県相馬郡小高町仲町二丁目82
☎（0244）44－4114㈹

印　刷　株式会社まつざき印刷
福島県双葉郡浪江町高瀬根木内100
☎（0240）34－6655㈹